

自閉スペクトラム症児を育てる親の診断から就学前における感情体験に関する研究

後 藤 梨 華

自閉スペクトラム症（Autistic spectrum disorder：以下、ASDとする。）児の親にとって、就学の時期は危機的な状況の時期であり、就学の時期はとりわけ精神的に不安定になりやすく、一度就学先を決定しても、不安と肯定を繰り返すことが明らかとされている。また、入園前後で療育に通っていない場合、それまで支援を受けていなかった分だけ小学校入学に向けての不安が大きいたことが示されている。そこで、就学に向けて早期からの支援の重要性が指摘されている。早期からの支援につながる1つのきっかけとして、診断を受けることがあげられる。しかし、診断告知時にネガティブな感情のみを体験した親は、その後の支援への移行が遅れ、支援者も親もお互いに十分に連携をとれないまま、就学の時期を迎えてしまう事例が報告されている。そのため、就学に向けて早期からの支援につなぐ際には、親の感情に寄り添った支援が重要であると考えられる。本研究では、本研究ではASD児の母親を対象に、就学先決定に向けて親がどのような感情を体験してきたのか、その過程を支援者との関わりに焦点を当て、明らかにすることを目的とした。本研究では、ASDの診断を受け、支援機関に継続的に関わっているこどもの母親（以下、母親）3名を対象に、半構造化面接を実施した。面接では、診断を受けるまでの経緯や就学先決定までの経緯、就学先を考える中で支援になったこと、就学先を決定した時の気持ちについて尋ねた。分析には、時間を捨象せずに等しくあるいは類似した等至点に至るまでの人々の人生の多様性を検討することができる複線径路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling：以下、TEMとする。）を使用した。TEMによる分析の結果、3名中2名が【満足した選択をする】と【決定における安心感】に収束しており、これらを等至点とした。残り1名は【満足しているが、迷いも残る選択をする】に収束しており、これを両極化した等至点とした。等至点に到達した事例では、母親の感情の揺れ動く時点で、【専門の支援機関からの助言や受けとめ】といった支援者からの関わりがあり、幼児期早期から就学先決定まで継続して支援を受けていた。そして、母親は、専門の支援機関や進学先の小学校から母親の感情を受け止めてもらう中で、満足や安心感の伴う就学先決定に至っていた。母親がこどもの障害に気づいてから就学の時期まで、支援者がその時々で揺れ動く母親の感情に寄り添った関わりをすることで、継続的な支援につながっていることが示唆された。また、満足や安心感の伴う就学先決定に向けて、専門の支援機関からの継続した支援や、進学先の小学校が母親の感情を受けとめることの重要性が示唆された。